

# 弥生時代前期の諸問題 ～三ツ井遺跡からの検討～

はじめに

1. 氷式系削痕深鉢形土器について
2. 長原系壺形土器について

おわりに

はじめに

三ツ井遺跡は尾張平野部における弥生時代前期の良好な基準資料となった。特に、尾張平野部の遠賀川系土器受容期の様相を考えるうえで重要な資料となろう。今回は三ツ井遺跡で出土した資料から派生する2つの問題点を整理してみよう。

まず、氷式系削痕深鉢形土器。今回改めて認識できた削痕系土器の出自について、三ツ井遺跡からの検討を行い、周辺部の遺跡、さらに中部高地との比較検討を試みる。

次に、長原系壺形土器。三ツ井遺跡SX01出土の条痕紋系壺形土器がどのような背景で生まれたかを整理し、その後の展開を探る。

以上の2点について、三ツ井遺跡から出土した資料に基づいて検討する。

## 1. 氷式系削痕深鉢形土器について

### (1) 問題の所在

削痕系土器は、遠賀川系土器と在来の突帯紋系土器とが折衷して成立した深鉢・甕形土器として考えられてきた（永井1996など）。そして、その分布は尾張平野部周辺のごく限られた地域にのみ定着すると考えられてきた。時期的に見ても尾張編年I－2～3期の間に見られるのみである（石黒・宮腰1996）。また、削痕系土器は深鉢・甕形土器のみ、すなわち煮炊具のみで、他の形態はない。

さて、三ツ井遺跡では、従来削痕系土器と考えられていた資料に加え、氷式系深鉢形土器が共伴している。この氷式系深鉢形土器と削痕系土器を比較検討した結果、削痕系土器はより氷式系深鉢形土器に接近していることが明らかになった。

ここでは、まず三ツ井遺跡から出土した資料のうち、氷式系深鉢形土器と削痕系土器の類似点整理し、どのような変遷を考えられるのかを整理する。そのうえで、氷式系深鉢形土器と削痕系土器が同一の系統であるかを検討していく。

まず、今回「氷式系削痕深鉢形土器」とした事例を提示する。これには削痕系土器と称されてきた土器も含む。私はかつて削痕系土器を「突帯紋系ケズリ甕形土器」として扱い、在来の突帯紋系土器と遠賀川系土器が折衷した土器として考えてきた（永井1996）。しかし、今後は氷式系土器と遠賀川系土器、さらに在来の突帯紋系土器、3つの系統が折衷した土器として考えを改める。特に、氷式系深鉢形土器に接近し、成立すると考えるため「氷式系削痕深鉢形土器」と称した。

## (2) 三ツ井遺跡の事例

三ツ井遺跡では、5つの遺構から出土している。本文で時期比定したとおり、I-2期に相当する資料群である。ここでは、氷式系削痕深鉢形土器を中心に、細分した3段階、古・中・新の順に三ツ井遺跡の事例を提示してみよう。

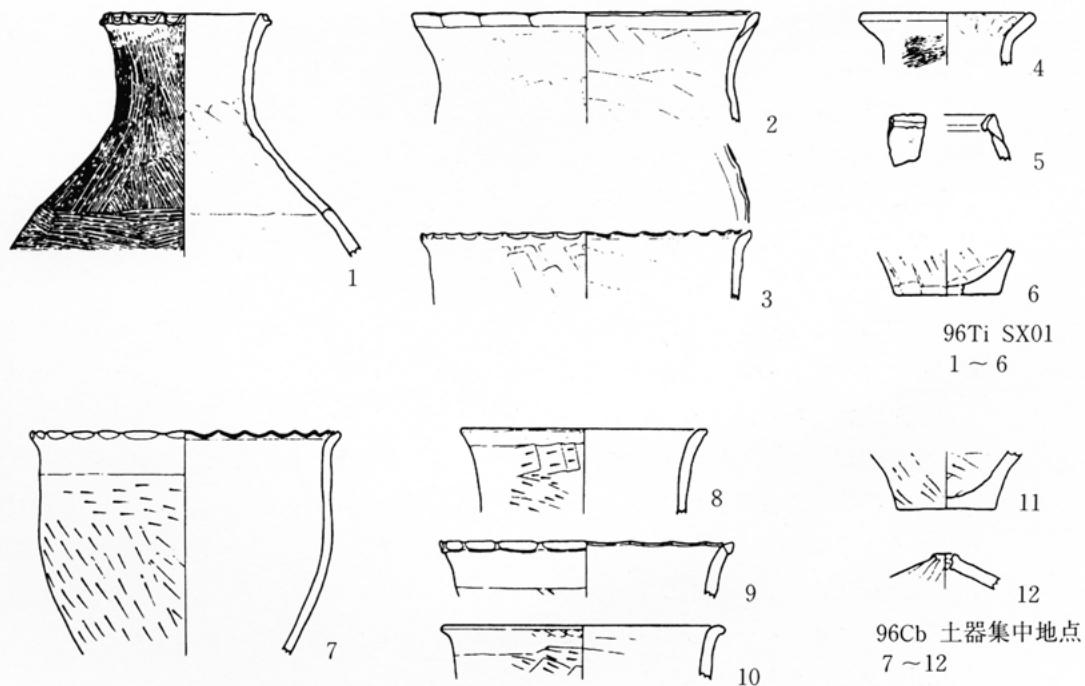
### I-2期古段階 (第1図)

96TiSX01資料は条痕紋系壺形土器・内傾口縁土器・遠賀川系壺形土器が共伴する。

氷式系削痕深鉢形土器は2・3・6。2は口縁外面に連続指頭押圧を施すタイプ。頸部がややくびれる器形。外面調整は縦方向の板ケズリを行い、頸部にその後横ナデを行う。3は口縁端部に連続指頭押圧を施すタイプ。頸部はくびれず、口縁内面を強く横ナデしたためか、口縁部が外反傾向にある。外面調整は縦方向の板ナデを行う。6は底部。外面調整は縦方向の板ケズリ、底部付近はその後板ケズリを行う。

96Cb土器集中地点は遠賀川系壺蓋形土器と共に伴する。

氷式系削痕深鉢形土器は7~11。7は口縁端部に連続指頭押圧を施すタイプ。頸胴部の境目が調整によって明確に分かれる。頸部は板ケズリ調整の後、横ナデを行う。胴部は上位が横方向の板ケズリ、下位は縦方向を基本に板ケズリを行う。9は口縁外面に連続指頭押圧を施すタイプ。頸胴部の境目は7と同様に、調整によって明確に分かれる。8・10は口縁部に連続指頭押圧を持たないタイプ。口縁端部に面取りを行う。外面調整は縦方向の板ケズリ、その後、口縁部周辺に横ナデを行う。11は底部。外面に縦方向を基本とする板ケズリ調整を行う。



第1図 三ツ井遺跡出土 I-2期古段階資料 (S=1/6)

I - 2 期中段階 (第 2 図・第 3 図上段)

96CbSK153は遠賀川系壺形土器・鉢形土器と共に伴する。

氷式系削痕深鉢形土器は16。口縁端部に連続指頭押圧を施すタイプ。頸部を意識しているためか、外面の口縁直下に横方向の板ケズリを行う。胴部はやや斜方向の板ケズリを行う。

96CbSB03は遠賀川系壺蓋・壺・鉢・甕形土器と条痕紋系深鉢形土器が共伴する。

氷式系削痕深鉢形土器は28~35。28~30は口縁外面に連続指頭押圧を施すタイプ。29は28・30に比べ、頸胴部の境目が上位にある。また、頸部を横ナデしたのち、胴部にミガキ調整を行う。32~35は口縁部に連続指頭押圧を持たないタイプ。32は頸部から口縁部周辺に横ナデを行い、その後口縁内面に面取りを行う。33~35は胴部に縦方向のケズリ調整を行い、その後口縁部周辺に弱い横ナデを行う。

I - 2 期新段階 (第 3 図下段)

96TiSK01は遠賀川系壺蓋・壺・鉢形土器が共伴する。

氷式系削痕深鉢形土器は37。甕化指向が強く、三ツ井遺跡のなかでは異質な器形。名古屋市北区月繩手遺跡出土資料の新相に比較的多い器形。頸部に横方向のミガキ調整を行う。

胴部は縦方向の板ケズリ調整を行い、その後、ミガキ調整を胴部上位に行う。

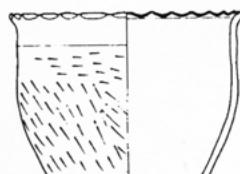
A類



(3) 三ツ井遺跡の氷式系削痕深鉢形土器について

他の遺跡と比較する前堤として、三ツ井遺跡内での変遷を試みる。

B類



時間的な位置づけは、前項で示した。これに基づき、氷式系削痕深鉢形土器を分類し、その変遷過程を以下に示す。

分類

分類は基本的に口縁部の特徴で行う。

口縁外面に連続指頭押圧を施すタイプをA類、口縁端部に連続指頭押圧を施すタイプをB類、口縁部に連続指頭押圧を持たないタイプをC類とする。

C類



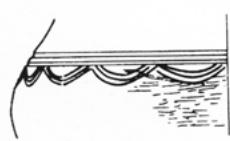
氷式系土器と遠賀川系土器との類似性に置き換えれば、A・B類は氷式系深鉢形土器に接近するタイプ、C類は遠賀川系甕形土器に接近するタイプとなる。



13



16



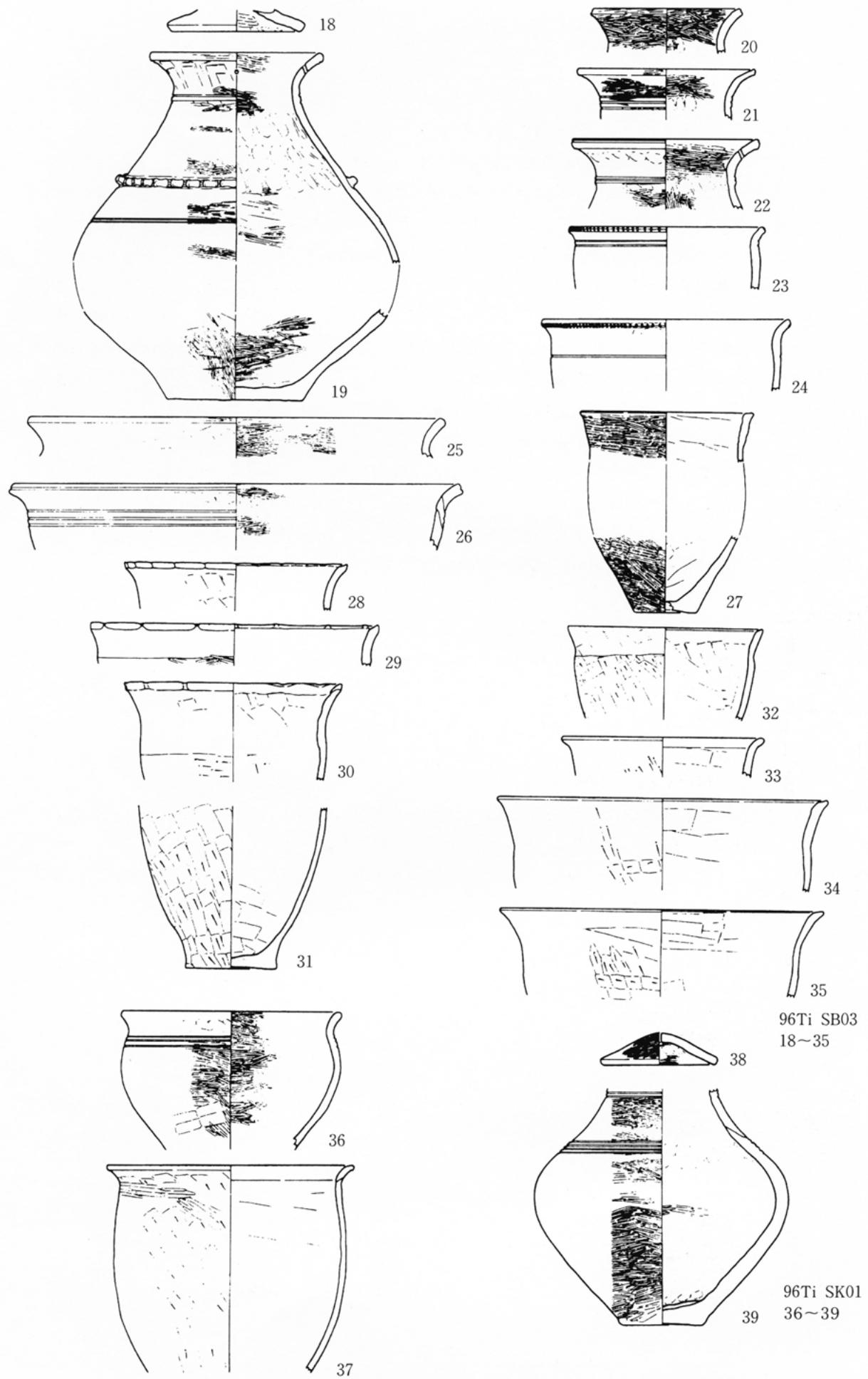
14



17

第2図 三ツ井遺跡出土 I - 2 期中段階資料 (S = 1 / 6)

96Cb SK153  
13~17



第3図 三ツ井遺跡出土 I-2期中~新段階資料 (S=1/6)

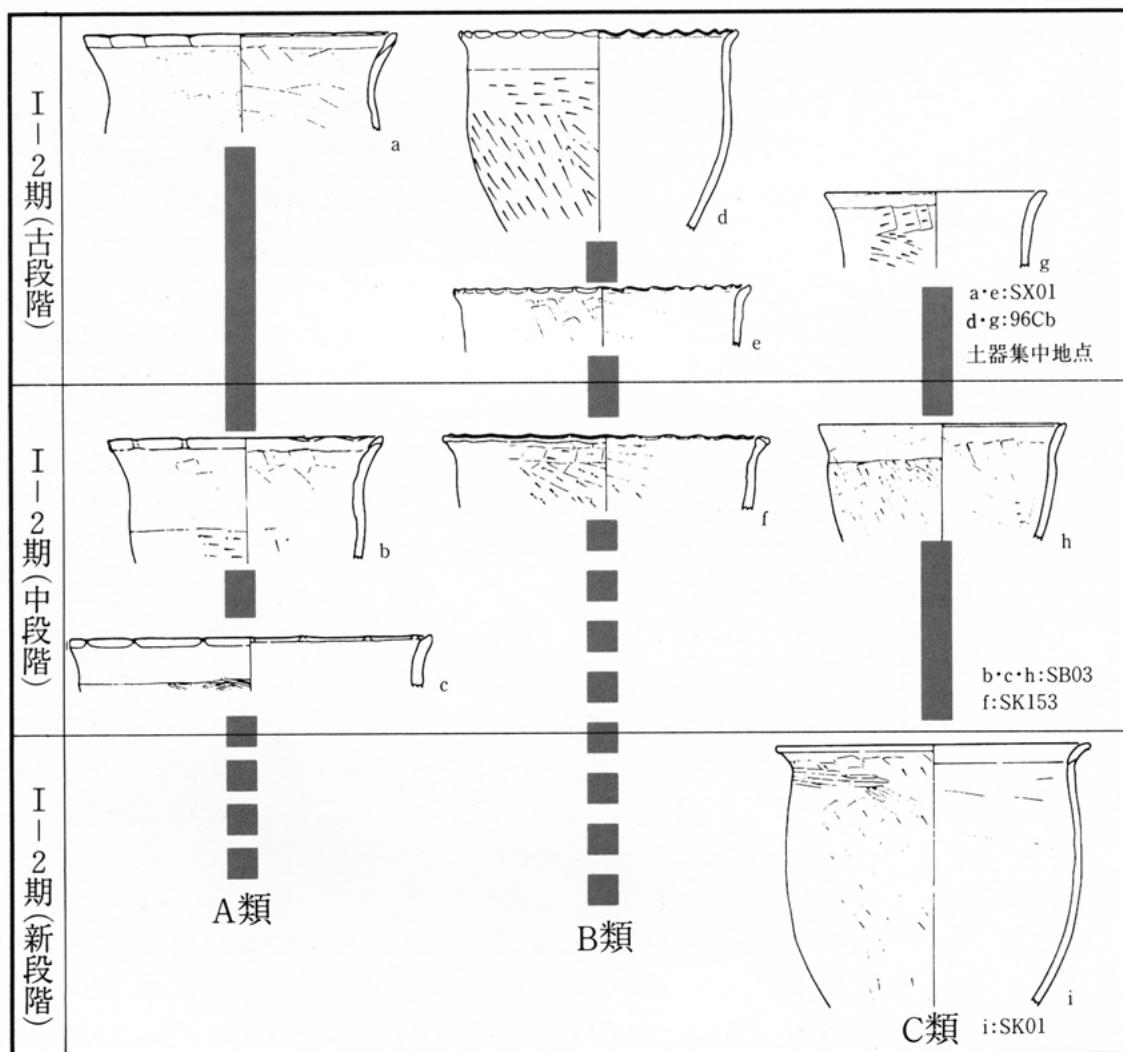
## 変遷

**A類**：口縁外面の連続指頭押圧については、ピッチの長短（3～5cm）があるものの、時期的な変遷ではなく、口径の大小によるものと考えられる。すなわち、ピッチの長いものは口径が大きく、短いものは口径が小さい傾向にある。型式学的な視点からみると、以下の2点が指摘できる。まず、頸部のくびれ度について見てみると、強いものが古相、弱いものが新相。次に、頸部と胴部の境目の位置について見てみると、下位になるものが古相、上位になるものが新相。これら2点について、現状では相関関係が認められる。すなわち、頸部のくびれが強く、頸胴部の境目が下位になるものが古相、頸部のくびれが弱く、頸胴部の境目が上位になるものが新相となる。

**B類**：A類と同様な変遷が考えられる。ただ、頸胴部の境目がA類よりも変化が早く、古段階には弱い横ナデ程度になる。

**C類**：頸胴部の境目を意識した調整が中段階まで続く。その後、新段階には甕化指向が加わる。

A～C類、すべてに共通する変遷は、頸胴部の境目を意識した調整の変化である。この変遷は三ツ井遺跡以外では確認できない。また、A・B類は尾張周辺地域で三ツ井遺跡のみ見られる資料もある。



第4図 三ツ井遺跡における冰式系削痕深鉢の変遷図（縮尺1:6）

#### (4) 尾張平野部の氷式系削痕深鉢形土器について

ここでは、遺構出土の確認できる名古屋市月繩手遺跡と一宮市山中遺跡を中心に三ツ井遺跡との比較検討を試みる。また、尾張平野部において浮線紋系浅鉢形土器以外に氷式系深鉢土器がI-1期に確認できる。これも含めて検討していく。

##### 分類

先に示した三ツ井遺跡のA～C類に、D類を付け加える。

**D類**：基本的にはC類と共通する要素を持つ。相違点は、口縁端部の刻みである。これは、遠賀川系土器により接近する要素として注目できる。遠賀川系土器との相違点をあげれば、頸部の沈線紋帶が見られること、粘土帶が内傾接合、以上2点である。

##### 変遷

I-1期に併行する突帶紋系土器の遺跡は尾張平野北西部に位置する山中遺跡・下り松遺跡、北東部に位置する松河戸遺跡、名古屋台地に位置する古沢町遺跡があげられる。また、朝日遺跡では貝殻山地点の抽出資料のほか、96SK238から遠賀川系土器の良好な一括資料が確認されている。しかしながら、遠賀川系土器と突帶紋系土器、あるいは氷式系土器の共伴例はいまだ確認されておらず、I-1期を設定する条件は整っていない。したがって、氷式系深鉢形土器の時期比定も推測の域を出ない。

さて、変遷図に示した氷式系深鉢形土器（1・2）は、形態・紋様・調整などの共通性、あるいは共伴する浮線紋系浅鉢形土器の時期比定からI-1期に相当する資料である。これらは、いわゆる細密条痕を胴部に持つ深鉢形土器であるが、一方でケズリ調整を行う深鉢形土器が共伴する。中部高地においても、同時期に比定できる御社宮司遺跡や石行遺跡などで細密条痕を持たない、粗製深鉢形土器とされる一群の土器が一定量認められる。ただ、I-2期以降にみられる氷式系削痕深鉢形土器のA・B類のように頸部にくびれを持つ形態がI-1期には見られない。したがって、現状においてI-1期に遡る氷式系削痕深鉢形土器の存在は確認できず、氷式系細密条痕深鉢形土器からの系譜を想定しておく。

3は三ツ井遺跡ではB類とした氷式系削痕深鉢形土器が条痕紋系土器に接近する資料で、条痕紋系土器と氷式系土器の折衷土器として注目できる。

I-2期古段階の資料は三ツ井遺跡以外に良好な資料はない。したがって、三ツ井遺跡との併行関係から導き出さなければならない。4・5は山中遺跡2次調査資料で、従来突帶紋期の終末、I-1期に比定されていた資料である。本稿では、三ツ井遺跡SX01・96Cb土器集中地点の資料との比較からI-2期古段階とした。三ツ井遺跡では遠賀川系土器と共伴するが、山中遺跡では不明である。これは単に確認されていないだけなのか、あるいは遺跡の実態なのかは今後の資料増加を待たねばならない。5の突帶紋系深鉢形土器は、朝日遺跡貝殻山地点の抽出資料からも裏付けされるように、遠賀川系土器と共伴する深鉢形土器である。氷式系削痕深鉢形土器を突帶紋系ケズリ深鉢形土器として想定していた祖形に相当する土器もある。したがって、氷式系削痕深鉢形土器の系譜を考える上で、在来の突帶紋系土器と氷式系深鉢形土器との折衷土器である可能性は否定できない。

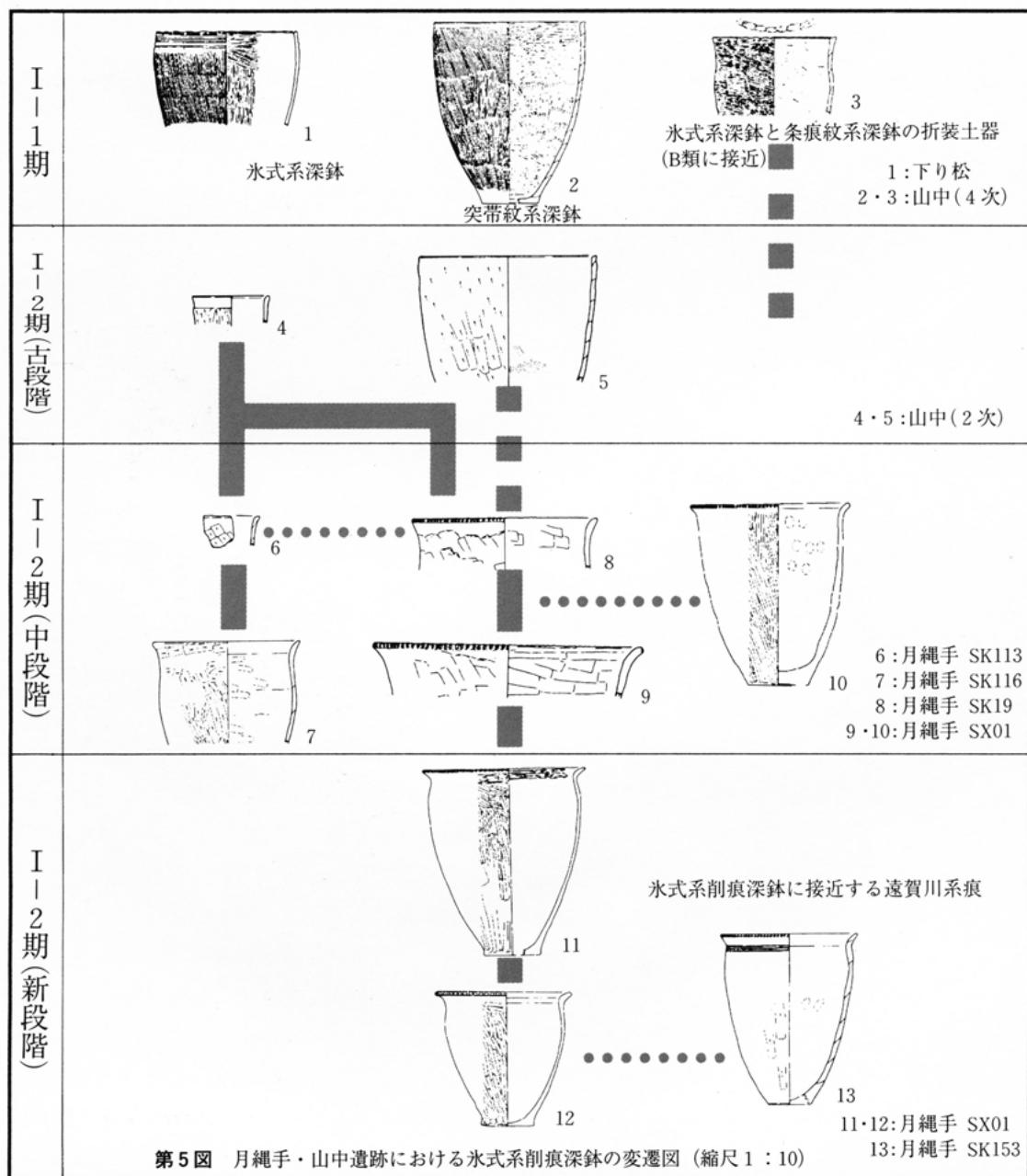
I-2期中段階の資料としては、月繩手遺跡SK113・SK116・SK19などがある。C類は三ツ井遺跡と同様な変遷が認められる。一方、この段階に出現するD類は月繩手遺跡における氷式系削痕深鉢形土器の主体を占めるタイプである。三ツ井遺跡では確認されなかつたタイプである。D類の特徴である口縁端部の刻み目は、先に示したように遠賀川系甕形



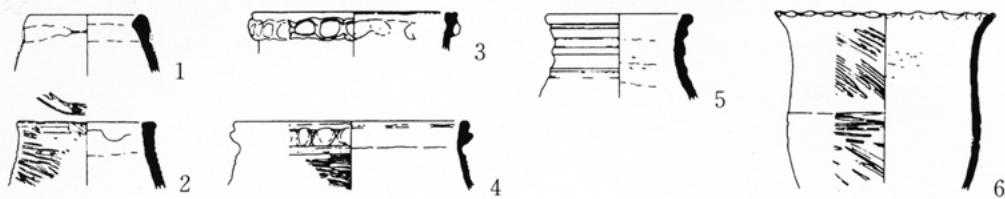
土器に接近する特徴である。したがって、C類とD類の差異はどれだけ遠賀川系甕形土器に接近するかといった評価につながり、2つのタイプの出土頻度は氷式系削痕深鉢形土器の遺跡差として考えられる。換言すると、氷式系削痕深鉢形土器は三ツ井遺跡より月繩手遺跡の方がより遠賀川系甕形土器に接近していると言えよう。

I-2期新段階の資料は月繩手遺跡SX01がある。三ツ井遺跡ではC類の甕化指向を指摘したが、月繩手遺跡の場合、形態は遠賀川系甕形土器と酷似する。また、板ケズリの後にミガキ調整を行う例が顕著に見られる。さらに、13のように頸部に沈線紋帯を施す類例もあり、内傾接合である点を除けば氷式系削痕深鉢形土器に接近する遠賀川系甕形土器と言っても過言ではない。

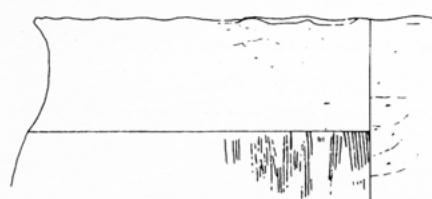
このように、氷式系削痕深鉢形土器は遠賀川系甕形土器と折衷する事象が読み取れる資料群であり、尾張平野部の煮炊具を考えるうえで重要な意味を持っている。



内傾口縁土器 条痕紋系壺形土器 突帶紋系変容壺 水式系深鉢形土器(B類)



水式系深鉢形土器(B類)



水式系深鉢形土器(B類)



1 ~ 8:御社宮司遺跡

水式系深鉢形土器(C類)



条痕紋系壺形土器

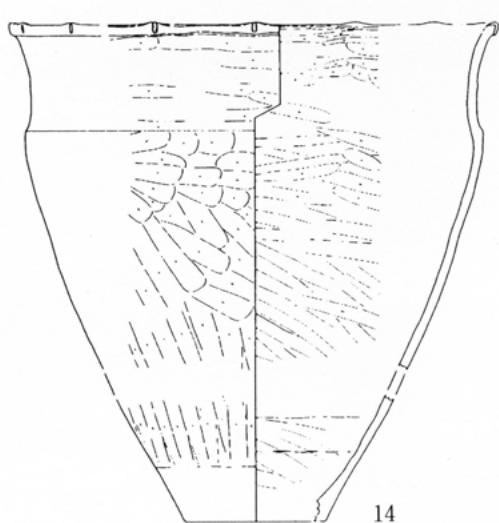


12



13

水式系深鉢形土器(C類)



14

条痕紋系壺形土器



15

9 ~ 15:長野県松本市石行遺跡

第6図 中部高地の水式系深鉢形土器と関連資料 (縮尺1:6)

## 2. 長原系壺形土器について

### (1) 長原系壺形土器の認識

近畿地方の縄文時代晩期後半に長原式とされている土器群がある。そのなかでも今回注目するのは、壺形土器である。長原式の壺形土器は突帯紋系土器様式のなかで、甕・深鉢変容壺として出現すると言われている。この変容壺は、口酒井式から船橋式を経て壺形土器として定着する。したがって、伊勢湾周辺に影響を与える段階の壺の形態は、変容壺ではなく、壺形土器の形態として捉えることができる。また、伊勢湾周辺には長原式以前に存在する変容壺がある。この伊勢湾周辺の変容壺との違いを明確にするために、近畿地方の壺形土器あるいはその影響下で成立する伊勢湾周辺の壺形土器に対して「長原系壺形土器」と称し、その特徴を次項に3点あげた。

ここでは、長原系壺形土器における近畿地方と伊勢湾周辺の比較検討を通して、伊勢湾周辺における壺形土器の成立・展開を考えてみた。

### (2) 近畿地方の長原系壺形土器（第7図）

近畿地方の突帯紋系壺形土器については、佐藤による詳細な分析がある（佐藤1994）。本稿は、伊勢湾周辺の壺形土器と比較する要素として、（A）頸部と胴部の境目を意識した調整手法、（B）底部付近のケズリ手法、（C）胴頸部から口縁部の形態、以上3点について突帯紋3期（長原式）の壺形土器を検討してみたい。これらの資料の時期的な根拠は概ね佐藤論文（佐藤1994）に拠る。また、突帯紋系土器編年は泉拓良の広域編年に拠る（泉1990）。

#### A. 頸部の境目を意識した調整手法

佐藤の分析した資料、11点のうち唐古・鍵遺跡資料（第7図16）を除くすべて頸部と胴部の調整が明確に違う。基本的には全体をケズリ調整をしたのち、頸部にナデ調整をする。このナデ調整により頸胴部の境目が明瞭に現れる。他の資料、長原遺跡第9層資料（第7図9～11）や口酒井11次東群資料（第7図21）などからも追認できる。

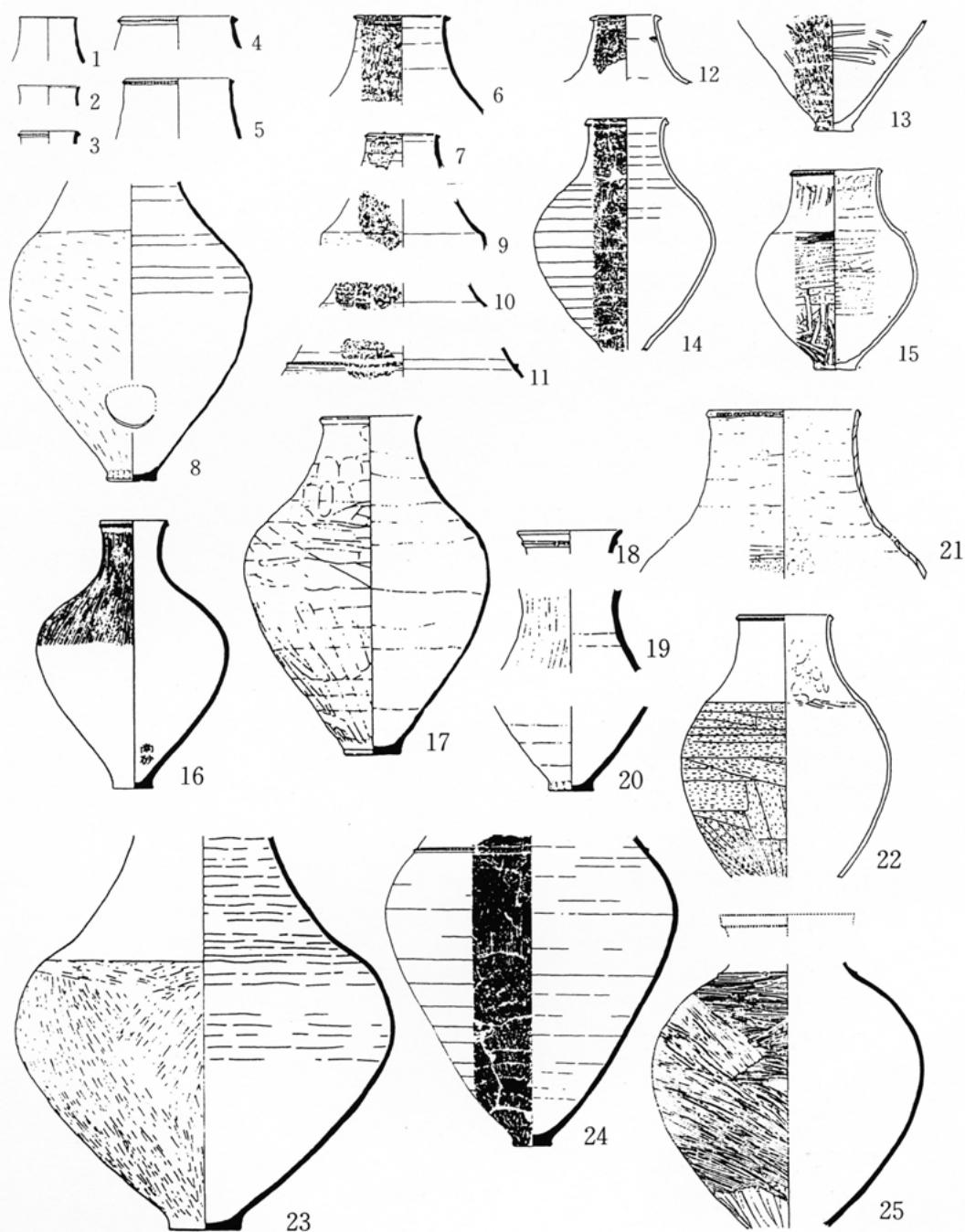
#### B. 底部付近のケズリ手法

底部付近と胴部下位のケズリ方向の異なる資料が一定量確認できる（第7図22・25）。底部付近は基本的にタテ方向のケズリ、その後ヨコ方向あるいは右下がりの斜位方向のケズリ調整をする。なお、伊勢湾周辺の条痕紋系壺形土器は底部付近にタテ方向のケズリをするが、胴部調整ののち、最終調整の場合が多い。

#### C. 頸胴部から口縁部の形態

ほとんどの資料は、胴部が張り、頸部に向かってゆるやかに内傾し、口縁部付近で直立する形態となる。口縁部には貼付突帯がめぐり、刻目を入れる資料が多い。また、突帯は口縁端部に連続する。唐古・鍵資料（第7図16）は、突帯部分がやや下位に見える。これは、口縁端部周辺の強いヨコナデにより、突帯上面が押され、口縁端部から離れて見えるためである（佐藤1994）。ほかの資料に関しても、口縁端部をヨコナデする資料が多く、突帯の形状は断面が下向きの三角形となる。

以上、3点を伊勢湾周辺との比較要素とする。基本的には、従来から指摘があるように、同時期の深鉢形土器の調整手法と類似する。ただ、佐藤が指摘する（佐藤1994c）ように、突帯紋2期から壺形土器として型式変化したもので、長原系壺形土器には1条突帯が優性である。



1~5 長原Ⅱ調査区 I・E区 6~11 長原Ⅲ才9層 12~14 久宝北 15 若江北 16 唐古 17 今里  
18~20 大開SD402上層 21 口酒井11次東群 22 口酒井6次 23 北白川追分町 24 弘川 25 雲井

第7図 近畿地方の長原系壺形土器 (S = 1/10)

### (3) 伊勢湾周辺における長原系壺形土器の系譜と変遷

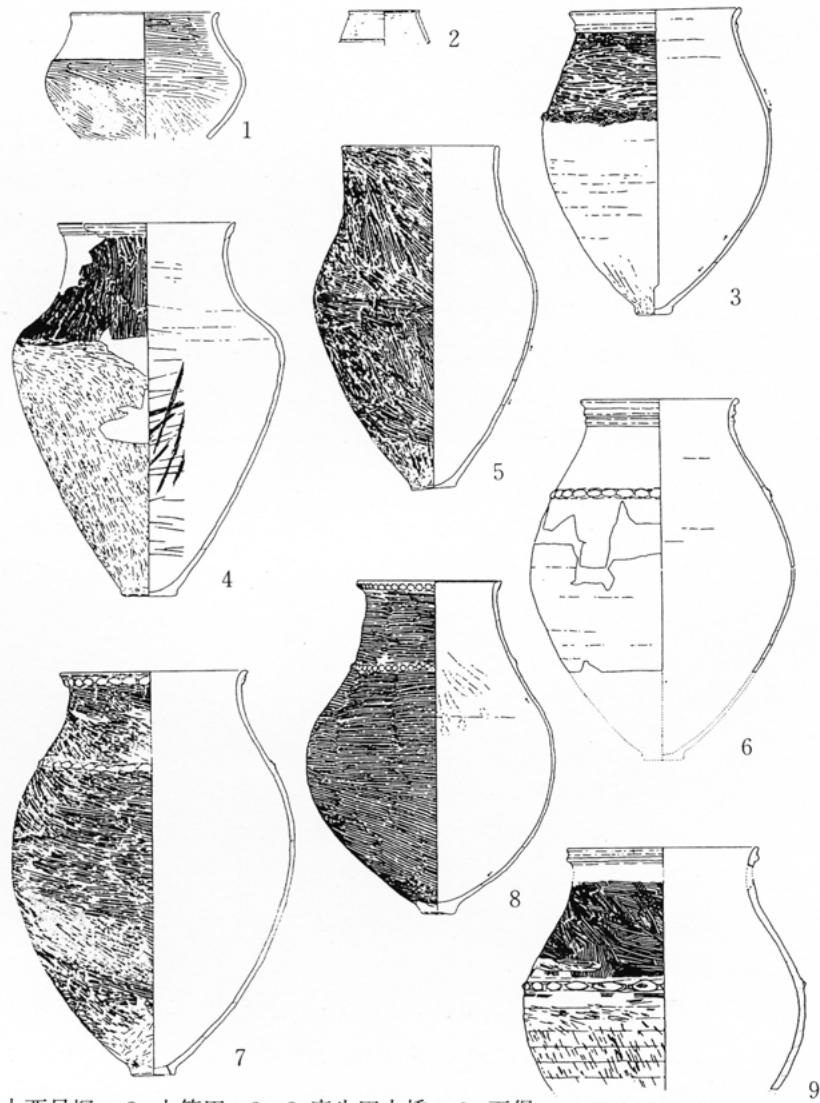
#### 壺形土器の2系統

伊勢湾周辺の壺形土器は大きく2つの系統が存在する。その2系統とは変容壺と長原系壺形土器である。これをまず、整理してみよう。

##### A. 変容壺（第8図）

変容壺は突帯紋3期前半に相当する麻生田大橋遺跡資料からの検討によって認識された（安井1991・前田1992・佐藤1997）。本稿では、変容壺の詳細な検討を目的としないため、要点をまとめて以下の検討に備える。

伊勢湾周辺の変容壺は、突帯紋2期後半に出現し3期で消失する。基本的には甕・深鉢変容壺が主体となるが、出現期は浅鉢変容壺（第8図1・2）も見られる（岩瀬1994・新田1993）。また、伊勢湾西岸域で成立したとされる「伊勢形壺」は変容壺のなかでも特異な存在である（第8図3・6・9）。2条突帯深鉢形土器から変容した伊勢形壺は条痕紋期まで継続する。したがって、変容壺は甕・深鉢変容壺、浅鉢変容壺、伊勢形壺、以上3系統を考えなければならない。



1 大西貝塚 2 上箕田 3~8 麻生田大橋 9 天保  
(1・2は浅鉢形変容壺、4・5・7・8は深鉢形変容壺、3・6・9は伊勢形壺)

第8図 伊勢湾周辺の変容壺 (S = 1/10)

## B. 長原系壺形土器（第9・10図）

伊勢湾周辺の長原系壺形土器は、近畿地方の土器そのものではない。先に示した近畿地方の長原系壺形土器の3要素と共に通する一群の壺形土器である。ただし、必ず3要素が含まれるとは限らない。この近畿地方と共に通する3要素を個別に取り上げ、検討してみよう。

### a. 頸胴部の境目を意識した調整

頸部と胴部の境目を意識して、調整方向あるいは調整手法を変えている。ただ、近畿地方は胴部に板ケズリする手法が一般的であるが、伊勢湾周辺の長原系壺形土器は、おおむね器面調整に貝殻条痕を用いる。その意味では条痕紋系土器である。該期の壺形土器は、器面全面にヨコ方向の条痕を施す条痕紋系土器が主流となるにもかかわらず、この流れに逆らう一群が長原系壺形土器だ。

### b. 底部付近のケズリ手法

西浦遺跡（第10図14）、炉畠遺跡（第9図5）、中長遺跡（第10図11～13）、鎌水遺跡（第10図16）、零岩寺遺跡（第10図15）で確認できる。突帯紋期から条痕紋期の変容壺や深鉢形土器にはあまり見られない手法で、長原系壺形土器に目立つ手法。

### c. 頸胴部から口縁部の形態

長原系壺形土器は少なくとも2型式認められる。胴部の肩が張り細頸となるもの、胴部の肩が張らず太頸となるものがある。概して前者が多くみられ、近畿地方と共に通する。

以上、3要素に近畿地方の長原系壺形土器との共通要素を見いだした。

次に変容壺との相違点を検討してみよう。変容壺は佐藤の分析が示すとおり、深鉢形土器・甕形土器と共に通する調整手法で捉えることができる。換言すると、形態上の相違はあっても調整手法には差がない。したがって、くびれ度の違いによって形態上は判別できるが、調整手法からは判別しにくい。一方、長原系壺形土器は条痕紋系の深鉢形土器や甕形土器と共に通する調整手法がなく、近畿地方の壺形土器と共に通する要素が主体となる。

このように、変容壺と長原系壺形土器は別系統で捉えることができる。変容壺は、汎西日本的な広範囲にわたる壺化指向のなかで、各地独自の変遷が指摘されている。一方、伊勢湾周辺の長原系壺形土器は、共通要素が強い近畿地方の壺形土器と接近する。したがって長原系壺形土器は、変容壺のように在来要素から成立するものではなく、壺形土器として確立した状況で近畿の壺形土器、すなわち長原系壺形土器の諸要素から成立する土器である。

### 長原系壺形土器の変遷

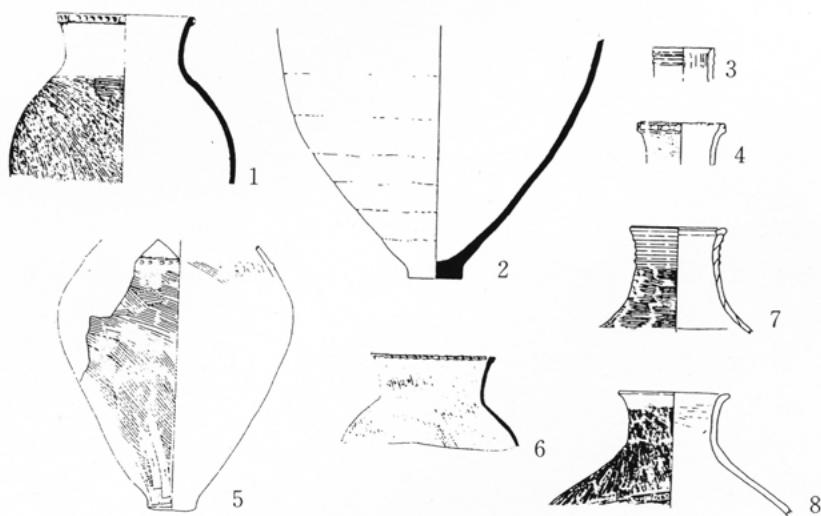
長原系壺形土器の特徴と系譜は前述した通り。以下、古相・新相を示す。

#### 【古相】

頸部に条痕調整がなく、ナデあるいは板ケズリで頸胴部の境目が意識されているもの。さらに、胴部最大径の近く境目があるものが古相、頸部が直立するところに調整の境目がくるものが新相となる。胴部に張りがあり、最大径が胴部上位になるもの。押圧突帯の位置は口縁端部直下になる。口縁端部の面取りは強くなく、弱いナデ調整を行う。

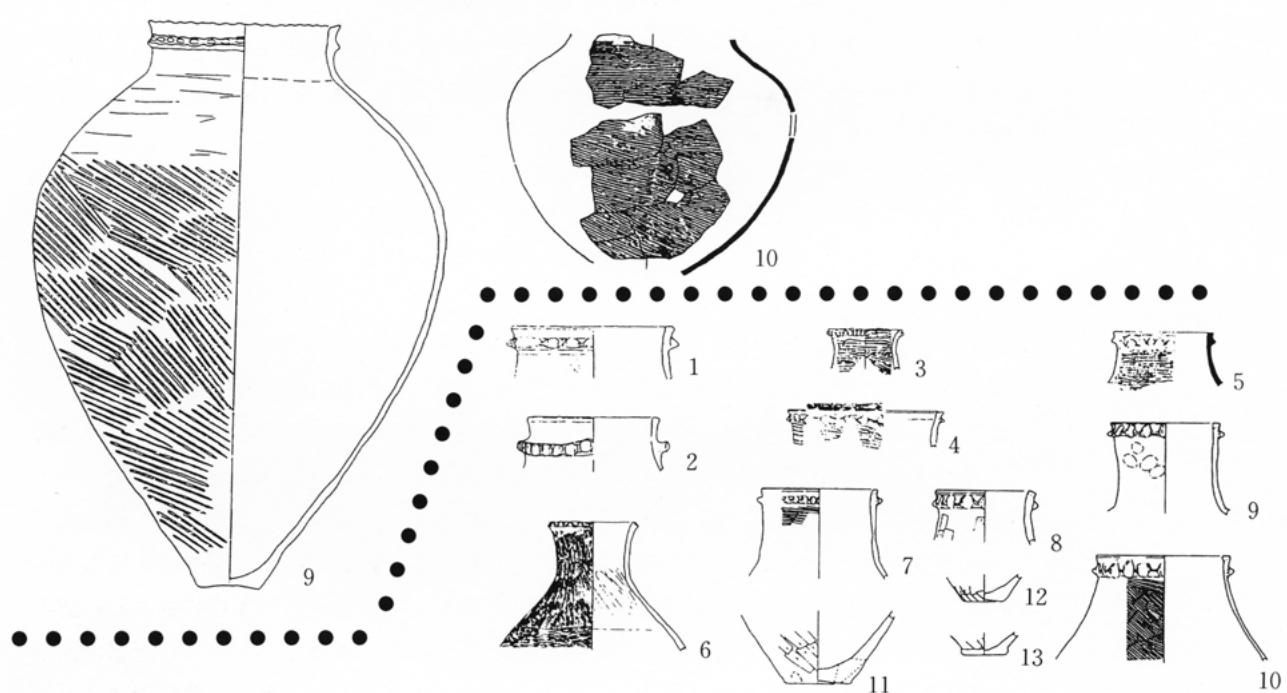
#### 【新相】

頸胴部の境目が調整によって区別されない。器面全面にヨコ方向の条痕調整を施すものが優位となる。ただし、境目が区別されても頸部・胴部ともに条痕調整となる。胴部は球胴形に近いものがある。太頸になるものは新相。押圧突帯の位置は口縁端部から少し下



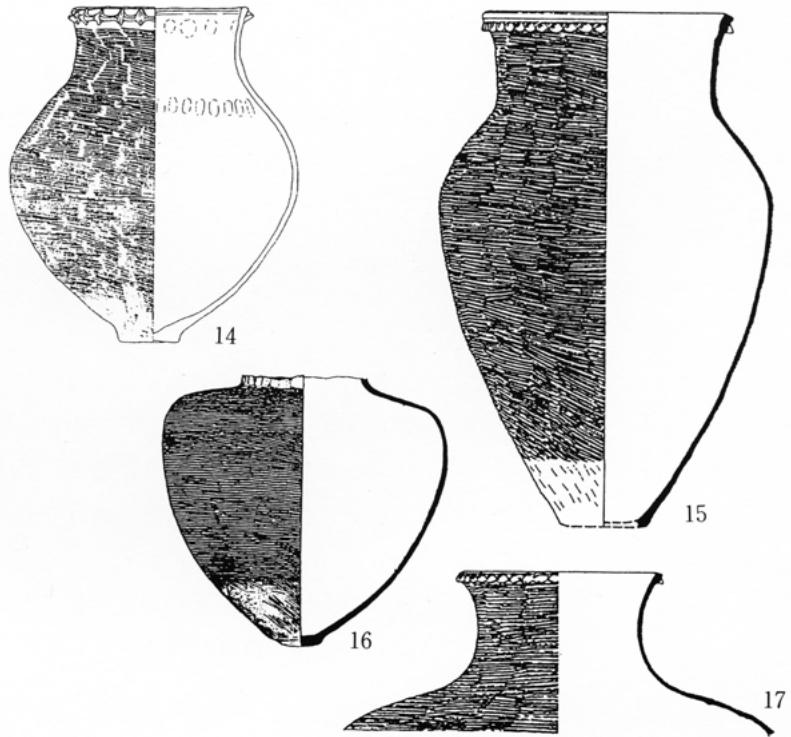
第9図  
伊勢湾周辺における突帶紋期の長原系壺形土器  
S = 1 / 10

- 1・2 阿弥陀堂  
3・4 はいづめ  
5・6 炉 番  
7 山中 SD01下層  
8 西 浦  
9 芹 川  
10 鐘 水



第10図  
伊勢湾周辺における条痕紋期の長原系壺形土器  
S = 1 / 10

- 1・2 はいづめ  
3・4 大 牧  
5 炉 番  
6 三ツ井  
7~13 中 長  
14 西 浦  
15 零岩寺  
16 鐘 水  
17 京ヶ峰



がるものが多い。口縁部の面取りが強く、口縁内面に折り返しが付くものが多い。

次に、古相・新相を考慮して、個々の資料に時期的な変遷を当てはめてみる。

#### 【突帯紋期】

泉の広域編年では突帯紋3期が当てはまる。ただ、3期の古い部分では見られない。伊勢湾周辺で器面全面条痕調整の壺形土器・深鉢形土器がセットで確認できる、新しい部分に伴う。この新しい部分を仮に後半としよう。

現状では、西浦遺跡をはじめ、7遺跡10例。阿弥陀堂遺跡資料（第9図1）は、最も古い資料としてあげられる。胴部があまり張らない器形であることを除けば、頸胴部の境目に段を持ち、頸部はミガキ、胴部はヘラ状工具の条痕調整、口縁端部直下の押圧突帯といった、古い様相を兼ね備えている。また、はいづめ遺跡資料（第9図3・4）もおそらく古い段階に考えられる。

これらの資料より若干新しい様相を含む資料が5例ある（第9図6・7・8・9・10）。頸胴部の境目は意識されるものの、頸部と胴部の調整手法が同じとなり、調整方向によって区別を付ける例が増える。また、新相となりうる例が炉畠遺跡（第9図5）である。2条突帯になる例は、東岸域（東三河部）以外になく、北岸域では唯一となる。近畿地方に目を向けると、滋賀県弘川遺跡の例（第7図24）が類似する。

#### 【条痕紋期】

従来の櫻王式がほぼ相当し、突帯紋シンポの条痕紋Ⅰ期（突帯紋土器研1993）。ここでは、2段階に分けて示す。

古相の要素を持つ例は、三ツ井遺跡など4例（第10図3・6・14・16）。

三ツ井遺跡の例は、遠賀川系土器を伴う資料のなかで、最も古い例。頸部はユビあるいは板による調整ではなく、貝殻条痕による調整。ただ、タテ方向という点、胴部との調整方向の違いでは、頸胴部の境目を意識し、わずかながら段を持つといった古い様相が残っている。共伴する遠賀川系土器は壺形土器の口頸部が1点のほか、氷式系削痕深鉢形土器も数点ある（SX01資料）。尾張編年（石黒・宮腰 1996）のⅠ-2期古段階に相当する資料として注目できる。

鎌水遺跡の例（第10図16）は、肩部が張り、頸胴部の境目が頸部の直立するところまで上がるものの、頸胴部の境目が明瞭なもの。京ヶ峰遺跡の例（第10図17）は、鎌水遺跡の頸胴部の境目を意識しないことから新相とも考えられる。

明らかに新相を示す資料（第10図1・2・4・5・7～10）としては、押圧突帯が口縁部から少し下がる位置になるものがあげられる。中長遺跡の2例（第10図8・9）を除いて頸胴部の境目を意識する調整はない。

#### (4) 三ツ井遺跡の条痕紋系壺形土器を取り巻く様相

三ツ井遺跡から出土した条痕紋系壺形土器は、上記のように突帯紋系壺形土器、すなわち長原系壺形土器の特徴を色濃く残す土器である。従来の櫻王式とされていた壺形土器のなかでも最も古い土器である。共伴した資料からもⅠ-2期古段階に比定できる。

さて、三ツ井遺跡のように条痕紋系土器様式のなかに近畿地方の突帯紋系土器様式が系統融合して成立する土器群がどのような位置を占めているのか？そして、この現象が一過性のものなのか？を問い合わせてみよう。

伊勢湾周辺の長原系壺形土器の分布を見てみると、概ね美濃・尾張北部・西三河地域を中心に拡がっている。すなわち、尾張南部を取り巻く地域に分布の中心がある。そしてこの地域には、変容壺が主流ではなく、長原系壺形土器が主流になる。

ところで、伊勢湾東岸域にあたる伊勢地域には現状では見当たらない。突帶紋期には変容壺と伊勢形壺が主流、条痕紋期には遠賀川系壺形土器が主流となる。また伊勢湾東岸域、特に東三河地域では、突帶紋期には変容壺と伊勢形壺が主流、条痕紋期になっても基本的には変容壺の延長上にあり、ようやく条痕紋Ⅱ期になって長原系壺形土器の系譜を持つ壺形土器が定着する。東三河地域の条痕紋Ⅱ期以前に長原系壺形土器が全くないとは言い切れない。それは、変容壺の形態を持つ土器の中に、長原系壺形土器の特徴を示す土器もあるからだ。しかし、主流にはならず、あくまでも長原系壺形土器に接近する土器が存在する程度である。

ここで問題としたいのは、尾張北部・美濃地域を中心に展開する長原系壺形土器のその後である。今回は、突帶紋期から条痕紋Ⅰ期を対象に検討を行ったが、条痕紋Ⅱ期以降の壺形土器、特に条痕紋系細頸壺の系譜が問題となる。尾張編年で示せば、Ⅱ-1期以降の壺形土器の系譜である。佐藤は条痕紋系細頸壺について、Ⅱ-3期に出現し、Ⅲ-1期以降に続条痕紋系土器と平沢型の長頸壺に分離すると言う（佐藤1996）。佐藤は、朝日遺跡、すなわち尾張南部の資料から細頸壺の系譜を考えている。たしかに、Ⅱ期の資料で検討できる資料が朝日遺跡以外にあまりない。しかし、条痕紋系壺形土器の成立・展開を尾張北部あるいはその周辺に求める立場では、尾張南部に持ち込まれた細頸壺と想定する。いずれにせよ、結論は資料増加を待つしかない。特に尾張南部を取り巻く周辺地域の資料に期待される。

#### おわりに

以上、氷式系削痕深鉢形土器と長原系壺形土器について問題提示した。いずれも、三ツ井遺跡から出土した良好な資料をどのように整理したらよいか？を考えた中間報告である。いずれ資料の増加を待ち、再検討する必要性もあろう。最後に、本稿の要点を記して今後の課題と展望としたい。

- (1) 従来、削痕系土器（突帶紋系ケズリ甕）とされてきた遠賀川系土器の甕形土器は三ツ井遺跡の資料によって、氷式系深鉢形土器に系譜を持つ土器から成立したと考えられる。
- (2) 氷式系深鉢形土器は遠賀川系土器に接近する尾張北部地域で急速に甕化指向が進み、氷式系削痕深鉢形土器を出現させた。
- (3) 氷式系削痕深鉢形土器の出現時期は尾張北部地域に遠賀川系土器が展開するⅠ-2期古段階であり、中～新段階で急速に拡がる。
- (4) 長原系壺形土器は、伊勢湾周辺の条痕紋系壺形土器の成立展開に多大な影響を与える。
- (5) 西日本全域において甕化指向が突帶紋期に始まり、伊勢湾周辺にも独自の変容壺が展開する。一方、美濃・尾張北部・西三河といった、遠賀川系土器が主体となる地域の周縁部の条痕紋系壺形土器は、突帶紋系土器様式の長原系壺形土器の特徴を採用する。さらにその後の壺形土器、特に細頸壺へと継承され条痕紋系壺形土器の主要な形態として長原系壺形土器の特徴は残存する。

(6) このような壺形土器の成立・展開に、三ツ井遺跡の条痕紋系壺形土器は、突帯紋系土器から条痕紋系土器への移行過程をよく示す資料として注目できる。

#### 参考・引用文献

- 愛知考古学談話会編 1985 「〈条痕文系土器〉文化をめぐる諸問題」資料編I  
浅岡俊夫 1988 「伊丹市口酒井遺跡の凸帯文土器」(高井悌三郎先生喜寿記念事業会編『歴史学と考古学』)  
石川日出志 1982 「三河・尾張における弥生文化の成立」(『駿台史学』第52号)  
石黒立人・宮腰健司 1996 「編年編・尾張」(『YAY! (やいっ!)』弥生土器を語る会)  
泉 拓良 1989 「中国・四国以東の突帯紋系土器様式」(『縄文土器大観』第4巻)  
泉 拓良 1990 「西日本凸帯文土器の編年」(『文化財学報』第八集 奈良大学文学部文化財学科)  
一宮市史編纂室編 1970 「新編一宮市史」資料編一  
岩瀬彰利編 1995 「大西貝塚」(豊橋市埋蔵文化財調査報告書第19集)  
岩野見司編 1982 「尾張病院山中遺跡発掘調査報告」一宮市教育委員会  
大江まさる 1965 「飛驒の考古学I」  
大江まさる編 1973 「炉畠遺跡」各務原市教育委員会  
大參義一編 1989 「はいづめ遺跡」岐阜県教育委員会  
岡本茂史編 1987 「知立市西中遺跡群発掘調査報告書」知立市教育委員会  
岡本茂史 1988 「櫻王式土器の新例」(愛知考古学談話会編『〈条痕文系土器〉文化をめぐる諸問題』資料編II・研究編)  
小田桐 淳 1991 「縄文時代」(『長岡京市史』資料編1)  
刈谷市教育委員会編 1987 「芋川遺跡第2・3次発掘調査概報」  
紅村 弘 1978 「東海先史文化の諸段階」資料編II  
紅村 弘 1987 「西日本・中部日本における弥生時代成立論」  
小林秀夫・百瀬長秀 1982 「長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書茅野市その5」長野県教育委員会  
佐藤由紀男 1994a 「長頸壺の出現とその意義」(『地域と考古学』向坂綱二先生還暦記念論集)  
佐藤由紀男 1994b 「煮炊きする壺」(『考古学研究』第40巻第4号)  
佐藤由紀男 1994c 「近畿地方の突帯紋土器の壺、覚書き」(『みづほ』第14号)  
佐藤由紀男 1996a 「縄文・弥生変換期の壺形土器」(坂詰秀一先生還暦記念会編『考古学の諸相』)  
佐藤由紀男 1996b 「長頸壺の出現に関する覚書き」(『YAY! (やいっ!)』弥生土器を語る会)  
滋賀県教育委員会編 「高島郡今津町弘川遺跡」(『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅶ-3』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会)  
設楽博巳 1982 「中部地方における弥生土器の成立過程」(『信濃』第34巻第4号)  
末永雅雄・小林行雄ほか 「大和唐古弥生式遺跡の研究」(京都帝国大学文学部考古学研究報告第16冊)  
竹原 学ほか 1987 「松本市赤木山遺跡群II」松本市教育委員会  
谷口 肇 1996 「条痕壺覚書き」(『YAY! (やいっ!)』弥生土器を語る会)  
田村陽一編 1991 「近畿自動車道埋蔵文化財発掘調査報告」第3分冊6 (三重県埋蔵文化財調査報告87-12)  
丹治康明編 1991 「雲井遺跡 第1次発掘調査報告書」神戸市教育委員会  
突帯文土器研究会編 1993 「突帯文土器から条痕文土器へ」(第1回東海考古学フォーラム・豊橋大会)  
突帯文土器研究会事務局編 1995 「縄文/弥生 変換期の考古学」(第1回 東海考古学フォーラム豊橋大会の記録)  
寺川史郎・金光正裕編 1987 「久宝寺北(その1~3)」大阪府教育委員会・財団法人大阪文化財センター  
中村友博 1987 「中部地方の弥生土器 3. 水神平式土器」(『弥生文化の研究』第4巻弥生土器)  
永井宏幸 1993 「条痕文土器成立期をめぐる諸問題」(『突帯文土器から条痕文土器へ』第1回東海考古学フォーラム)  
永井宏幸 1996 「変容・変換する土器」(『YAY! (やいっ!)』弥生土器を語る会)  
長島暉慎編 1982 「大阪市平野区長原遺跡発掘調査報告書II」財団法人大阪市文化財協会  
新田 剛編 1993 「上箕田遺跡」(鈴鹿市埋蔵文化財調査報告12)  
服部信博編 1992 「山中遺跡」(愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第40集)  
浜崎一志・千葉 豊 「京都大学北部構内BD33区の発掘調査」(京都大学埋蔵文化財研究センター編『京都大学構内遺跡調査研究年報 1987年度』)  
樋上 昇編 1994 「貴生町遺跡II・III 月繩手遺跡II」(財団法人愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第55集)  
松尾信裕編 1983 「大阪市平野区長原遺跡発掘調査報告III」財団法人大阪市文化財協会  
松田 訓編 1990 「月繩手遺跡 貴生町遺跡」(財団法人愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第12集)  
前田佳久編 1993 「神戸市兵庫区大開遺跡発掘調査報告書」神戸市教育委員会  
豆谷和之 1994 「弥生壺成立以前」(『古代文化』VOL.46)  
南 博史編 1988 「伊丹市口酒井遺跡 第11次発掘調査報告書」伊丹市教育委員会・財団法人古代學協會  
三好孝一編 1996 「巨摩・若江北遺跡 第5次」(財団法人大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第15集)  
家根祥多 1982 「縄文土器」(『長原遺跡発掘調査報告II』財団法人大阪市文化財協会)  
家根祥多 1996 「遠賀川式土器の成立をめぐって」(『論苑考古学』坪井清足さんの古希を祝う会編)